

## マルコに因る聖福音

第一章 一 神の子イイスス ハリストスの福音の始なり。二 諸預言者に録されしが如し、云く、視よ、我我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて、爾の道を備へしめん。三 野に呼ぶ者の聲在りて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよと。四 イオアン野に在りて洗を授け、罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳へたり。五 イウデヤの全地及びイエルサリムの人人出でて、彼に就き、己の罪を認めて、皆イオルダン河に於て彼より洗を受けたり。六 イオアンは駱駝の毛衣を衣、腰に皮の帶を束ね、蝗蟲と野蜜とを食へり。七 彼宣べて曰へり、我の後に更に我より強き者は来る、我屈みて、其履の帶を解くにも堪へず。八 我は水を以て爾等に洗を授けたり、彼は聖神を以て爾等に洗を授けん。

九 彼の日に當り、イイスス ガリレヤのナザレトより來りて、イオルダンに於てイオアンより洗を受けたり。一〇 直に水より上る時、天開け聖神の如く其上に降るを見たり。一一 又天より聲ありて云へり、爾は我の至愛の子、我が喜べる者なり。一二 聖神直に彼を引きて、野に適かしむ。一三 彼野に在ること四十日、サタナに試みられ、野獸と共に居り、天使等彼に奉事せり。一四 イオアンの囚はれし後、イイスス ガリレヤに來り、神の國の福音を傳へて二五 曰へり、期は満ち、神の國は邇づけり、悔改して、福音を信ぜよ。一六 ガリレヤの海邊

を行く時、彼はシモン及び其兄弟アンドレイが、網を海に施せるを見たり、蓋彼等は漁者なりき。一七 イイスス彼等に謂へり、我に従へ、我爾等を人を漁する者たらしめん。一八 彼等直に其網を遺して、之に従へり。一九 此より少しく進みて、ゼウエデイの子イアコフと其兄弟イオアンと、亦船に在りて、網を補へるを見て、二〇 直に彼等を召したり、彼等も父ゼウエデイを備人と偕に船に遺して、之に従へり。二一 カペルナウムに來れる後、安息日に遇ひて、彼會堂に入りて、教を宣べたり。二三 人人其訓を奇とせり、蓋彼等を教ふるに權ある者の如し、學士等の如きに非ず。二三 彼等の會堂に汚鬼を患ふる人あり、呼びて、二四 曰へり、唉ナザレトのイイススよ、我等と爾と何ぞ與らん、爾は我等を滅さん爲に來りしか、我爾が誰なるを知る、乃神の聖なる者なり。二五 イイスス彼を禁めて曰へり、口を緘ぢて、之より出でよ。二六 汚鬼は其人を拘攣させ、大なる聲を以て叫びて、之より出でたり。二七 人皆駭きて、相問ひて云へり、此れ何ぞ、此れ如何なる新しき教ぞ、蓋彼權を以て汚鬼にも命じて、亦彼に順ふ。二八 其聲名忽ガリレヤの四方に播まれり。二九 直に會堂より出でて、イヤコフ、イオアンと偕にシモン及びアンドレイの家に來れり。三〇 シモンの岳母熱を病みて臥したるに、或人直に之をイイススに告ぐ。三一 彼就きて、其手を執りて、之を起したれば、熱忽退きて、婦彼等に供事せり。三二 暮に及びて、日

の入る時、凡そ病を負ひ、魔鬼に憑らるる者を彼に昇き來れるあり。  
三三 邑舉りて門に集れり。三四 彼は種種の病に苦める多くの者を醫し、多くの魔鬼を逐ひ出し、且魔鬼に其ハリストスたるを識ることを言ふを許さざりき。三五 朝未だ夜の明けざる前に、彼起きて、出でて野の處に適き、彼處に於て祈禱せり。三六 シモン及び之と偕に在りし者其跡を追ひ、三七 既に遇ひて、彼に謂ふ、皆爾を尋ぬ。三八 彼は之に謂ふ、我等近傍の村と邑とに往くべし、我が彼處にも教を宣べん爲なり、蓋我は是が爲に來れり。三九 乃全ガリレヤに、彼等の會堂に於て、教を宣べ、且魔鬼を逐ひ出せり。四〇 癩病の者來りて、彼に求め、彼の前に跪きて曰く、爾若し望まば、我を潔むるを能す。  
四一 イイスス憫みて、手を伸べ、彼に觸れて曰く、我望む、潔まれ。  
四二 言ひ畢れば、癩病直に離れ、其人潔まれり。四三 イイスス嚴しく彼を戒めて、直に去らしめ、四四 又彼に謂ふ、慎みて、何事も人に語ぐる勿れ、乃往きて、己を司祭に示せ、且爾の潔まりし爲に、モイセイの命ぜし物を獻じて、彼等に證を爲せ。四五 然れども其人出でて後、多く宣べて、其事を播揚し、イイススはより顯に城に入るを得ずして、外なる野の處に居るに至れり、人四方より彼に來れり。

第二章 一 數日を越えて、彼復カペルナウムに入れり、彼が家に在る

こと聞えたれば、二 直に多くの人集りて、門の傍にも身を容るる處なきに至れり、彼は之に教を宣べたり。三 癩瘋の者を攜へて、彼に來れるあり、四人之を昇けり、四人の衆きに因りて、彼に近づくと得ずして、其在る處の屋蓋を啓き、之に穴して、癩瘋の者の臥したる牀を縋り下せり。五 イイスス彼等の信を見て、癩瘋の者に謂ふ、子よ、爾の罪は爾に赦さる。六 此に或學士等の坐せるあり、心の中に議して曰く、七 斯の人何ぞ斯く褻瀆を言ふ、獨神より外に、誰か罪を赦すを得ん。八 イイスス其神を以て、直に彼等が斯く己の衷に議するを知りて、彼等に謂へり、爾等何ぞ心の中に斯く議する、九 癩瘋の者に、爾の罪赦さると言ひ、或は起きて、爾の牀を取りて行けと言ふは、孰か易き。一〇 然れども爾等が人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知らん爲、(癩瘋の者に向ひて曰く、) 一一 爾に謂ふ、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。一二 彼直に置き、牀を取りて、衆の前に於て出でたり、衆駭きて、神を讚榮し、我等未だ嘗て斯くの如きことを見ざりきと云ふを致せり。一三 イイスス復海邊に出でしに、民皆彼に就き、彼之を教へたり。一四 過ぐる時、彼はアルフェイの子レワイイが税關に坐せるを見て、之に謂ふ、我に従へ、彼起ちて従へり。一五 イイススがレワイイの家に席坐せし時、多くの税吏及び罪人も亦彼と其門徒と偕に席坐せり、蓋此等の多くの者有り、而して彼に従へり。一六 學士等とファリセイ等とは彼が

税吏及び罪人と偕に食するを見て、其門徒に謂へり、彼は何ぞ税吏及び罪人と偕に食飲する。一七 イイスス之を聞き、彼等に謂ふ、康強なる者は醫師を求めず、乃病を負ふ者は之を需む、我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して、悔改せしめん爲なり。一八 イオアンとファリセイ等との門徒は齋せり、來りて彼に謂ふ、イオアンとファリセイ等との門徒は齋するに、爾の門徒が齋せざるは何ぞや。一九 イイスス彼等に謂へり、イイスス彼等に謂へり、婚禮の客は新娶者の尚彼等と偕に在る時、豈齋するを得んや、新娶者の彼等と偕に在る時は、齋するを得ず、二〇 然れども新娶者の彼等より取らるる日至らん、其日には齋せん。二一 新しき布片を用て舊き衣補ふ者あらず、然らずば新しき者は舊きを壞りて、其綻更に甚しからん。二三 又新しき酒を舊き革囊に盛る者あらず、然らずば新しき酒は囊を敗りて、酒漏れ、囊も亡びん、乃新しき酒は新しき囊に盛るべし。二三 安息日にイイスス禾田を過ぎ行けることあり、彼の門徒行く時穂を摘めり。二四 ファリセイ等彼に謂へり、觀よ、何ぞ彼等は安息日に行ふべからざることを行ふ。二五 彼は之に謂へり、爾等は、ダワイドが乏しくして、己及び其從者の飢ゑし時に行ひし事、二六 卽如何にして彼は、司祭長アワイアファルの時に、神の家に入りて、司祭等の外何人も食ふべからざる供前の餅を食ひ、且之を從者に與へしを、未だ嘗て讀まざりしか。二七 亦彼等に謂

へり、安息日は人の爲に設けられたり、人は安息日の爲に非ず、二八 故に人の子は亦安息日の主なり。

### 第三章

一 彼又會堂に入りしに、彼處に一手の枯へたる人あり。二 人人彼を罪せん爲に、安息日に於て斯の人を醫すや否やを窺へり。三 彼は手の枯へたる人に謂ふ、中に立てよ。四 又彼等に謂ふ、安息日には善を行ひ、或は惡を行ふ、生命を救ひ、或は之を滅す、孰か宜しき、彼等默然たり。五 イイスス怒を含みて、彼等を圖視し、其心の頑なるを憂ひて、斯の人に謂ふ、爾の手を伸べよ。之を伸ぶれば、其手は健になりしこと、他の手の如し。六 ファリセイ等出でて直にイロドの黨と共に、如何にして彼を滅さんと謀れり。七 イイスス門徒と偕に出でて、海邊に往けり、衆くの民はガリレヤより、又イウデヤ、ハイエルサリム、イドウメヤ、及びイオルダンの外より彼に従ひ、又テイルとシドンとの邊に居る者は、其行ひしことを聞きて、甚多く彼に來れり。九 彼は民の衆きに因りて、其門徒に己が爲に小舟を備へん事を命ぜり、人の彼に逼らざらん爲なり。一〇 蓋彼は多くの者を醫ししに因りて、凡そ疾ある者は彼に捫らん爲に擁し逼るに至れり。一一 又汚鬼は彼を見し時、其前に俯伏して、呼びて謂へり、爾は神の子なり、一二 唯彼は之に己を顯す勿らんことを厳しく戒めたり。一三 遂に山に登りて、自ら欲する所の者を召

したれば、來りて彼に就けり。一四 乃 十二人を立てたり、彼等が己と偕に居り、又之を遣して、教を傳へしめ、二五 且權を以て病を醫し、魔鬼を逐ひ出さしめん爲なり。一六 乃 シモン之をペトルと名づけたり、一七ゼウエデイの子イアコフ、及び其兄弟イオアン、彼等をワオアネルゲス、譯すれば、雷の子と名づけたり、一八アンドレイ、フィリップ、ワルフオロメイ、マトフェイ、フォマ、アルフェイの子イアコフ、ファデイ、シモン「カナニト」、一九及びイウダ「イスカリオト」、即 彼を賣りし者なり。二〇 彼等家に入りしに、民復集り、彼等餅を食ふ違なきに至れり。二一 彼の親屬は聞きて、彼を取らん爲に出でたり、蓋彼は狂へりと言へり。二二 又イエルサリムより下れる學士等は、彼はワエエルゼウルに憑られ、魔鬼の魁に藉りて、魔鬼を逐ひ出すと云へり。二三 彼は之を召して、譬を以て之に謂へり、サタナ如何ぞサタナを追ひ出すを得ん。二四 若し國自ら分れ争はば、其國立つ能はず、二五 若し家分れ争はば、其家立つ能はず、二六 若しサタナ自ら攻めて、分れ争はば立つ能はず、即 其終至れるなり。二七 人強き者の家に入りて、其器を劫す能はず、必 先づ強き者を縛りて、然る後其家を劫さん。二八 我誠に爾等に語ぐ、凡の罪と褻瀆と、人之を以て瀆さば、人の諸子に赦されん、二九 然れども聖神を瀆さん者は世世に赦されず、乃 永遠の定罪に干らん。三〇 斯く言へるは、人人が彼は汚鬼に憑らると言ひし故な

り。三一 彼の母及び兄弟來りて、外に立ち、人を遣して、彼を呼べり。三二 時に民彼を環りて坐せり、或 彼に謂へり、視よ、爾の母及び爾の兄弟外に在りて、爾を尋ぬ。三三 彼は之に答へて謂へり、孰か我が母、或は我が兄弟たる。三四 乃 環り坐せる者を環視して曰く、是れ我が母、及び我が兄弟なり、三五 蓋神の旨を行はん者は、其人即 我が兄弟、我が姉妹及び母なり。

**第四章** 一 復海濱に於て教へ始めしに、衆くの民、彼の許に集りたれば、彼舟に登りて、海に坐し、民皆海に沿ひて、陸に在りき。二 乃多くの譬を以て彼等を教へたり、其教に於て彼等に謂へり、三 之を聽け、種を播く者は播かん爲に出でたり。四 播く時道の旁に遣ちし者あり、鳥來りて、是を啄めり。五 土の薄き磽地に遣ちし者あり、土の深からざるに因りて、直に萌え出でしが、六 日の出でて後萎み、根なきに因りて、槁れたり。七 棘の中に遣ちし者あり、棘起きて、之を蔽ひたれば、實を結ばざりき。八 沃壤に遣ちし者あり、乃 發し長ずる實を結びて、或は三十倍、或は六十倍、或は百倍と爲れり。九 又日へり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。一〇 民の散じて後、彼を環れる者は十二徒と偕に、彼の譬の事を問へり。一一 彼は之に謂へり、爾等には神の國の奧義を知ること與へられたれども、彼の外の者には凡て譬を用ゐる、一二 蓋彼等は視て視れども見ず、聽きて

聽けども悟らず、恐らくは轉じて其罪を赦されん。二三 又彼等に謂ふ、爾等斯の譬を悟らざるか、然らば如何にして凡ての譬を識らん。一四 播く者は言を播くなり。一五 路の旁に遣ちたる者は、此れ播かるる言を聽きて後、直にサタナ來りて、彼等の心に播かれたる言を奪ふ。一六 磽地に播かれたる者は、同じく是れ言聽きて、直に喜びて受くれども、一七 己に根なきが故に暫時のみ、後言の爲に艱難或は窘逐に遇はば、直に躓く。一八 棘の中に播かれたる者は、是れ言を聽けども、一九 斯の世の慮と、貨財の惑と、其他の慾とは入りて、言を蔽ひて、實を結ばしめず。二〇 沃壤に播かれたる者は、是れ言を聽きて、之を受け、實を結ぶこと、或は三十倍、或は六十倍、或は百倍なり。二一 又彼等に謂へり、燈を取り來るは豈之を斗の下、或は牀の下に置かん爲なるか、之を燈臺の上に置かん爲に非ずや。二二 隠れて顯れざる者なく、藏して露ならざる者なし。二三 耳ありて聽くを得る者は聽くべし。二四 又彼等に謂へり、聽く所を愼め、爾等何の量を以てか人に量らば、是くの如く爾等にも量られん、且爾等聽く者に加へられん。二五 蓋有てる者は、之に與へられ、有たざる者は、其有てる物も、之より奪はれん。二六 又曰へり、神の國は人種を地に投ずるが如し、二七 夜に晝に寝ね興き、種如何に發し長ずるを知らず。二八 蓋地は自ら始に苗、次に穂を生じ、次に穂の中に穀を盈たす。二九 實の熟するに及びて、直に鎌を

遣す、穫る時至りたればなり。三〇 又曰へり、我等神の國を何に比へんか、抑何の譬を以て之を譬へんか、三一 此れ芥種の如し、其地に播かるる時は、地上の悉くの種より小しと雖、三二 播かれたる後は、萌え出でて、悉くの野菜より大になり、巨なる枝を出し、天空の鳥其蔭に棲むを得べきに至る。三三 イイスス斯くの如き多くの譬を以て、彼等が聽くを得る所に循ひて、教を宣べたり。三四 譬に非ずしては、彼等に語らざりき、獨處の時、悉く之を其門徒に解けり。三五 其日の暮に及びて、彼等に謂ふ、我等彼の岸に濟るべし。三六 彼等民を去らしめて、彼を猶舟に在るまま取りて往けり、他の舟も亦彼と偕に在りき。三七 颶風大に起り、浪舟に打ち入りて、殆ど滿つるに至れり。三八 時に彼は舟尾に在りて、枕して寝ねたり、彼を醒まして曰く、師よ、我等が亡ぶるを爾顧みざるか。三九 彼起きて、風を禁め、海に謂へり、默せ、靖まれ、風即息みて、大に穩になれり。四〇 又彼等に謂へり、爾等何爲れぞ是くの如く怯るる、何ぞ信なき。四一 彼等大に懼れて、互に謂へり、此れ何人ぞ、風も海も亦彼に順ふ。

**第五章** 一 遂に海の彼の岸なるガダラの地に至れり。二 彼が舟を離れし時、汚鬼を患ふる人墓より出でて、直に彼を迎へたり。三 此の人墓を住處と爲せり、鐵索を以てすとも、何人も彼を繋ぐ能はざりき、四

蓋彼は屢桎梏と鐵索とに繋がれたれども、鐵索を斷ち、桎梏を毀り、人彼を制するを得ざりき。五夜も晝も恒に山と墓とに在りて號び、又其身を石に打てり。六彼遙にイエスを見て、趨り附きて、之を拜し、七大なる聲を以て呼びて、曰へり、至上なる神の子イエスよ、我と爾と何ぞ與らん、神に因りて爾に求む、我を苦むる勿れ。八蓋イエス之に謂へり、汚鬼、斯の人より出でよ。九又之に問へり爾の名は何ぞ。答へて曰へり我名は大隊、我等多き故なり。一〇乃切に彼等を此の地の外に逐はざらんことを求めたり。一一彼處に、山の側に、冢の大なる群牧はれたれば、一二魔鬼皆彼に求めて曰へり、我等を冢に遣して、其中に入らしめよ。一三イエス直之を許せり汚鬼出でて、冢に入りしに、群は山坡より海に逸け、約二千匹ありて海に溺れたり。一四冢を牧ふ者奔りて、邑及び諸村に告げられたれば、人人有りしことを觀ん爲に出で、一五イエスに來りて、先に魔鬼を患ひ、大隊に憑られたる者が、衣を着、心慄にして坐せるを見て、懼れたり。一六見し者は魔鬼を患ひたる者に有りし事の如何、及び冢の事を彼等に語げられたれば、一七彼等はイエスに其境を離れんことを請へり。一八彼が舟に登れる時、魔鬼に憑られたる者彼と偕にせんことを求めたり。一九イエス許さずして、之に謂ふ、爾の家に爾の親屬に歸りて、彼等に主が如何なる事を爾に行ひ、及び如何に爾を憐みしを告げよ。二〇彼往きてデカポリに於てイエスが彼に如

何なる事を行ひしを宣べたれば、人皆之を奇とせり。二一イエス舟に乗りて、復彼の岸に濟りし時、衆くの民は、彼に集り、彼は海濱に在りき。二三視よ、會堂の宰の一人、イアイルと名づくる者來り、彼を見て、其足下に俯伏し、二三切に彼に求めて曰く、我が女死せんとす、請ふ來りて、之に手を按せ、之をして愈えて、生くるを得しめよ。二四イエス之と偕に往けり、時に衆くの民從ひ、彼に擁し逼れり。二五或婦十二年血漏を患ひ、二六多くの醫師に因りて多く苦み、其所有を盡く費したれども、聊も益なくして、益惡しくなれり。二七イエスの事を聞きて、民の中に後より來りて、彼の衣に捫れり。二八蓋曰へり、我第其衣に捫らば、愈ゆるを得んと。二九直に其血の源涸れて、婦其身に病の愈されしを覺えたり。三〇イエス忽自ら能の己より出でたるを覺え、民の中に顧みて曰へり、誰か我が衣に捫りたる。三一門徒彼に謂へり、爾は民が爾に擁し逼るを見るに、誰か我に捫りたると云ふか。三二然れども彼は圓視して、之を行ひし者を見んと欲せり。三三婦己に成りしことを知り、懼れ慄きて、來りて彼の前に俯伏し、悉くの實を以て彼に語げたり。三四彼は之に謂へり、女よ、爾の信は爾を救へり、安然として往き、爾の病より健になれ。三五彼が尚言ふ時、會堂の宰の家より人來りて曰く、爾の女己に死せり、何ぞ復師を煩はす。三六イエス語ぐる所の言を聞きて、直に會堂の宰に

謂ふ、懼るる勿れ、唯信ぜよ。三七 乃、パトル、イアコフ、及びイアコフの兄弟イオアンの外、誰にも己に従ふを許さず、三八 會堂の宰の家に來りて、人人の號咷、其哭きて大に叫ぶを見、三九 既に入りて、彼等に謂ふ、何ぞ咷ぎ、且泣く、小女は死せしに非ず、乃寢ぬるなり。四〇 人人彼を晒へり。彼衆を出して、小女の父母と彼に従へる者とを率ゐて、小女の臥せる處に入り、四一 小女の手を執りて、之に謂ふ、「タリファ、クミ」、譯すれば女よ、爾に言ふ、起きよ。四二 女直に起き、且歩めり、蓋其年は十二なり、見し者大に駭けり。四三 イイスス嚴しく彼等に之を人に知らしめんことを禁じ、又女に食を與へんことを命ぜり。

第六章 一 イイスス彼處を出でて、己の故郷に至れり、其門徒彼に従へり。二 安息日に及びて、彼會堂に於て教を宣べしに、衆くの聽ける者奇として曰へり、斯の人何より斯を得たるか、彼に賦へられし智慧は維れ何ぞ、是くの如き異能は如何にして其手に由りて行はるるか、三 彼は木工にして、マリヤの子、イアコフ、イオシヤ、イウダ、シモンの兄弟なるに非ずや、其姉妹は此に我等の間に在るに非ずや、乃彼の爲に惑へり。四 イイスス彼等に謂へり預言者は其故郷、其親屬、其家の外に於て尊ばれざるなし。五 乃彼處に於ては何の異能をも行ふ得ざりき、唯數人の病者に手を按せて、之を醫せり。

六 且彼等の不信を怪めり。次ぎて四周の諸村を巡りて、教を宣べたり。七 又十二門徒を召して、彼等を二人づつ遣し、彼等に汚鬼を制する權を與へたり。八 又彼等に、旅の爲に、一の杖の外、囊をも、糧をも、帶に貯ふる銅をも、一切執る勿らんことを命じ、九 唯履を著くるのみにして、二の衣を衣ること勿らしめたり。一〇 又彼等に謂へり、何處に於ても人の家に入らば、彼處に留りて、出づるに至れ。一一 若し爾等を接げず、爾等に聽かざる者あらば、彼處を出づる時、爾等が足の下の塵を拂へ、彼等に對する證を爲さん爲なり、我誠に爾等に語ぐ、審判の日に於て、ソドム及びゴモラは斯の邑より忍び易からん。一二 彼等出でて、悔改の教を宣べ、一三 且多くの魔鬼を逐ひ出し、多くの病める者に油を傳けて、之を醫せり。一四 イロド王イイススの事を聞きて、(蓋其名は揚れり) 曰へり、此れ授洗イオアンが死より復活せしなり、故に彼に由りて異能は行はる。一五 他の者は是れイリヤなりと曰ひ、又他の者は是れ預言者、或は諸預言者の一の若き者なりと曰へり。一六 惟イロド聞きて曰へり、是れ我が首を斬りしイオアンなり、彼は死より復活せり。一七 蓋此のイロドは人を遣して、イオアンを執へて、之を獄に繋げり、其兄弟フィリップの妻イロデアダの爲の故なり、其之を娶りたればなり。一八 蓋イオアンはイロドに謂へり、爾の兄弟の妻を娶るは宜しからずと。一九 イロデアダ彼を怨みて殺さんと欲したれども、能はざりき。

二〇 蓋イロドはイオアンを義にして聖なる人たるを知りて、彼を畏れ、及び彼を護り、彼に聞きて多くの事を行ひ、且欣びて彼に聞けり。二一 適好き機會の日は至れり、即イロド、其誕生日に於て諸大臣、千夫長、及びガリレヤの尊者の爲に筵を設けたり。二二 イロデアダの女入りて舞ひ、イロド及び共に席坐する者の喜を獲たり。王女に謂へり、爾が欲する所を我に求めよ、我爾に與へん。二三 又彼に誓へり、凡そ爾が我に求むる所は、我が國の半に至ると雖、爾に與へん。二四 女出でて、其母に謂へり、何を求むべき。彼曰へり。授洗イオアンの首。二五 女直に急ぎ入りて、王に求めて曰へり、我爾が授洗イオアンの首を今盤に盛りて我に與へんことを欲す。二六 王憂ひたれども、誓の爲、又共に席坐せる者の爲の故に、之を拒むを欲せざりき。二七 王直に一卒を遣し、其首を攜へんことを命ぜり。二八 彼往きて、之を獄に斬り其首を盤に盛り、攜へて之を女に與へ、女之を其母に與へたり。二九 其門徒之を聞きて來り、其屍を取りて、墓に藏めたり。三〇 使徒等イイススの許に集りて、凡そ行ひし事、教へし事を彼に告げたり。三一 彼は之に謂へり、爾等獨野の處に往きて、暫く休め。蓋來る者去る者多くありて、彼等食ふ違だになかりき。三二 乃舟に乗りて、彼等獨野の處に往けり。三三 民其往くを見て、多くの者彼等を識りたれば、諸の邑より徒歩にて共に趨り、其往く所に先だちて、彼の許に集れり。三四

イイスス出でて、群衆を見て、之を憫みたり、其牧者なき羊の如き故なり、乃多く之を教へたり。三五 時己に晩くなりて、門徒彼に就きて曰く、此は野の處にして、時己に晩し、三六 衆を去らしめよ、彼等が四 周の郷村に往きて、己の爲に餅を市はん爲なり、蓋彼等に食ふべき物なし。三七 彼答へて曰へり、爾等之に食を與へよ。彼に謂ふ、我等往きて、銀二百を以て餅を市ひ、之に與へて食はしめんか。三八 彼曰く、爾等に餅幾何かある、往きて觀よ。彼等知り得て曰く、五の餅及び二の魚。三九 彼は之を命じて、衆人を青草の上に區區に坐せりめたり。四〇 乃百人或は五十人づつ列列に席坐せり。四一 彼は五の餅及び二の魚を取りて、天を仰ぎて祝福し、餅を撃き、其門徒に與へて、衆の前に陳ねしめ、二の魚をも衆に分てり。四二 皆食ひて、飽きたり。四三 餘りたる屑と残りたる魚とを拾ひて、十二の筐に盈てたり。四四 餅を食ひし者は約五千人なりき。四五 イイスス直に其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去らしむる間に、己に先だちて、彼の岸なるワイフサイダに往かしめたり。四六 民を去らしめて後、彼祈禱せん爲に山に登れり。四七 暮に及びて、舟は海の中に在り、彼は獨陸に在りて、四八 彼等が舟を漕ぐに苦めるを見たり、風の彼等に逆ふ故なり。夜四 更の頃、彼海を履みて、彼等に近づき、而して彼等を過ぎんと欲せり。四九 彼等は其海を履むを見て、是れ怪物なりと意ひて呼べり、五〇 蓋皆彼を見て惶れた



り。彼直に之と語り、而して之に謂ふ、心を安んぜよ、是れ我なり懼るる勿れ。五一 乃舟に登りて、彼等に就きたれば、風息みたり。彼等中心に極めて甚しく駭き且奇めり、五二 蓋餅の奇蹟を悟らざりき、其心の頑なりし故なり。五三 既に濟り、ゲンニサレトの地に至りて、岸に泊り。五四 舟より出でし時、人人直に彼を識りたれば、五五 徧く近傍の地を馳せ廻りて、病ある者を牀に載せ、彼の在る所を聞き、彼處に昇き至れり。五六 凡そ彼の入りし所、或は邑、或は郷は、人其市に病者を置き、唯彼の衣の裾にだに捫らんことを求めたり、彼に捫りし者は愈ゆるを得たり。

第七章 一 イエルサリムより來りしファリセイ等と或學士等と彼の許に集れり。二 彼の門徒の中の或者が潔からざる手、即ち盥はざる手を以て餅を食ふを見て、之を咎めたり。三 蓋ファリセイ等及び悉くのイウデヤ人は、古人の傳を執りて、其手を潔く盥はざれば食はず、四 市より歸りて、自ら洗はざれば、亦食はず、此の外又多くの事あり、彼等受けて之を守れり、即ち杯、瓶、銅器及び牀を洗ふが若し。五 是に於てファリセイ等と學士等と彼に問ふ、爾の門徒は何ぞ古人の傳に遵はずして、盥はざる手を以て餅を食ふ。六 彼答へて之に謂へり、イサイヤは爾等、偽善者の事を善く預言せり、録されしが如し、云く、斯の民は口にて我を敬へども、其心は遠く我に離

る、七 彼等は人の誠を教と爲して、教へて、徒に我を尊むと。八 蓋爾等神の誠を棄てて、人の傳を執れり、即ち瓶杯を洗ひ、其他多く是くの如きを行ふ。九 又彼等に謂へり、爾等己の傳を守らんが爲に、善く神の誠を廢す。一〇 蓋モイセイ曰へり、爾の父及び爾の母を敬へ、又曰へり、父或は母を罵る者は死すべしと。一 然れども爾等曰ふ、人若し父或は母に對ひて、爾が我より得べき者は「コルワン」、譯すれば、禮物と爲れりと云はば、一二 爾等既に其人に己の父或は母の爲に何事も爲さざるを許す。一三 斯く爾等が設けし傳を以て神の言を廢し、且多くの是くの如きことを行ふ。一四 乃衆民を召して、之に謂へり、皆我に聽きて悟れ、一五 凡そ外より人に入る者は彼を汚す能はず、唯彼より出づる者は、斯れ人を汚すなり。一六 耳ありて聽くを得る者は聽くべし。一七 彼が民を離れて家に入りし時、門徒彼に譬の事を問へり。一八 彼は之に謂ふ、爾等も亦斯く悟鈍きか、豈知らずや、凡そ外より人に入る者は彼を汚す能はず、一九 蓋其心に入らず、乃腹に入りて外に出づ、是に由りて凡の食物は潔めらる。二〇 又曰へり、人より出づる者は、斯れ人を汚すなり。二二 蓋内より出づる、即ち人の心より出づる者は、惡念、姦淫、邪淫、兇殺、二三 盜竊、貪婪、惡毒、詭譎、邪侈、疾視、褻瀆、驕傲、狂妄、なり。二三 此等の惡は、皆内より出でて、人を汚すなり。二四 彼は彼處を起ちて、テイル及びシドンの境に來り、家に入

りて、人の知らんことを欲せざしが、隠るるを得ざりき。二五 蓋汚鬼を患ふる女を有てる婦彼の事を聞きて、來りて、其足下に俯伏せり。二六 此の婦は異邦人にしてシロフィニキヤに生れし者なり、彼は其女より魔鬼を逐ひ出さんことを請へり。二七 然れどもイイスス之に謂へり、先づ兒曹に飽かしむるを容せ、蓋兒曹の餅を取りて、狗に投ぐるは宜しからず。二八 婦彼に答へて曰へり、主よ、然り、但狗も食卓の下に在りて、兒曹の屑を食ふ。二九 彼は之に謂へり、此の言に因りて、往け、魔鬼は爾の娘より出でたり。三〇 婦其家に來りて、魔鬼已に出でて、女の其牀に臥せるを見たり。三一 イイスス復テイル及びシドンの境を出で、デカポリの境の中を経て、ガリレヤの海に至れり。三二 聾にして訥れる者を彼に攜へ來りて、手を其上に按せんことを求むる者あり。三三 彼獨之を攜へて、民を離れ、指を其耳に入れ、唾して其舌に捫り、三四 天を仰ぎて、歎息して、之に謂ふ、「エッファアファ」、譯すれば、啓け。三五 直に其耳は啓け、舌の結は解け、其言ふこと明になれり。三六 イイスス彼等に何人にも告げざらんことを戒めたり、然れども彼愈戒めて、彼等愈播揚せり。三七 且駭異に勝へずして曰へり、其爲せる事皆善し、聾者をも聞く者と爲し、啞者をも言ふ者と爲す。

第八章 一 當日民極めて多く有りて、食ふ物なかりしに、イイスス

其門徒を召して、之に謂ふ、二 我斯の民を憫む、蓋已に三日我と偕に在りて、食ふ物なし。三 我若し彼等を飢ゑて其家に歸らしめば、途中に憊れん、蓋其中に遠くより來りし者あり。四 其門徒彼に答へて曰へり、人此に野に在りて、彼等を飽かしむべき餅を何處より得んや。五 彼等に問へり、爾等に餅幾何かある。曰く、七。六 是に於て民に命じて、地に坐せしめ、七の餅を取りて、感謝して之を擘き、其門徒に與へて、之を陳ねしむるに、彼等は民の前に陳ねたり。七 又些須の小子魚あり、之をも祝福して、前に陳ねしめたり。八 乃食ひて飽き、其餘りたる屑七籃を拾へり。九 食ひし者は約四千人なりき。乃 彼等を歸らしめたり。一〇 直に其門徒と偕に舟に登りて、ダルマヌファアの境に來れり。一一 ファリセイ等出でて彼を詰り、彼を試みて天よりする休徴を求めたり。一二 彼中心より歎息して曰く、斯の世何ぞ休徴を求むる、我誠に爾等に語ぐ、斯の世に休徴は與へられざらん。一三 乃 彼等を離れて、復舟に登りて、彼の岸に往けり。一四 時に其門徒餅を取ることを忘れたり、舟には唯一の餅の外に有らざりき。一五 彼は之に戒めて曰へり、謹みて、ファリセイ等の酵とイロドの酵とを防げ。一六 彼等相議して曰へり、是れ我等に餅なきを指すなり。一七 イイスス之を知りて、彼等に謂ふ、何ぞ餅なきことを議する、爾等猶未だに知らず、未だに悟らざるか、爾の心猶頑なるか。一八 爾等目ありて視ざるか、耳ありて聽かざるか、亦

記憶せざるか。一九我五の餅を五千人の爲に擗きし時、爾等餘屑を拾ひて、幾筐に盈てしか。彼に謂ふ、十二。二〇又七の餅を四千人の爲に擗きし時、餘屑を幾筐に拾ひしか。曰く、七。二一彼等に謂へり、何ぞ悟らざる。二二ワイフサイダに來れるに、瞥者を彼に攜へて、之に捫らんことを求むる者あり。二三彼瞥者の手を執り、之を引きて、村の外に出で、其目に唾し、彼の上に手を按せて、見る所ありやと問へり。二四彼仰ぎ視て曰へり、我人人の行くこと樹の如くなるを見る。二五後復手を其目に按せて、彼に仰ぎ視ることを命じられたば、彼愈えて、明に庶物を見たり。二六乃彼は其家に遣して曰へり、村に入る勿れ、村の内の人に告ぐる勿れ。二七イイスス其門徒と偕にフィリップのケサリヤの諸村に出でしに、途中其門徒に問ひて曰へり、人人我に言ひて誰とか爲す。二八彼等對へて曰へり、授洗イオアンと爲し他の者はイリヤと爲し、又他の者は預言者の一人と爲す。二九彼は之に謂ふ、爾等は我を言ひて誰とか爲す。ペトル彼に對へて曰く、爾はハリストスなり。三〇乃彼等に戒めて、己の事を人に語る勿らしめたり。三一是に於て始めて彼等に人の子が多くの苦を受け、長老等と司祭諸長と學士等とに棄てられ、且殺され第三日に復活すべきことを教へたり。三二彼明に此の事を語れるに、ペトル彼に援きて諫めたり。三三彼身を轉じて、其門徒を見て、ペトルを戒めて曰へり、サタナ、我より退け、蓋爾は神の事を念

はず、乃人の事を念ふ。三四遂に民を其門徒と共に召して、彼等に謂へり、我に従はんと欲する者は、己を捨て、其十字架を負ひて我に従へ。三五蓋己の生命を救はんと欲する者は、之を喪はん、我及び福音の爲に己の生命を喪はん者は、之を救はん。三六蓋人若し全世界を獲とも、己の靈を損はば、何の益かあらん。三七抑人何を與へて、其靈の償と爲さんや。三八蓋此の姦惡の世に於て、我及び私の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖なる天使等と偕に來らん時彼を耻ぢん。

第九章 一又彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、神の國が權能を以て來るを見んとする者あり。二六日を越えて、イイススはペトル、イアコフ、イオアンを攜へ、獨彼等のみを率ゐて、高き山に登り、彼等の前にて容を變へたり。三其衣は耀きて、雪の如く甚白くなれり、地上の漂工の白くする能はざる者の如し。四イリヤはモイセイと偕に彼等に現れて、イイススと語れり。五ペトル、イイススに謂ふ、夫子、我等此に居るは善し、我等三の廬を建てて一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん。六蓋自ら言ふ所を知らざりき、彼等大に懼れし故なり。七又雲有りて彼等を蓋ひ、雲より聲出でて云ふ、此は我の至愛の子なり、彼に聽け。八彼等倏環視して、既に誰を見ず、獨

イイススのみ彼等と偕に在りき。九山を下る時、イイスス彼等に人の子が死より復活せざる先には、見たることを人に語る勿らんことを命じたり。一〇 彼等斯の言を其中に留めて、相議して曰へり、死より復活すとは何の意ぞ。一一 又彼に問ひて曰へり、學士等がイリヤ先に來るべしと云ふは何ぞや。一二 彼答へて曰へり、然り、イリヤ先來りて、萬事を整ふべし、人の子も亦、之を指して録されしが如く多くの苦を受け、人に卑めらるべし。一三 唯我爾等に語ぐ、イリヤ已に來り、而して人人欲する所に隨ひて彼を侍へり、彼を指して録されしが如し。一四 既に門徒の所に來りて、群衆の彼等を環り、且學士等の彼等と議論するを見たり。一五 衆民倏彼を見て駭き、趨り前みて安を問へり。一六 彼學士等に問ひて曰へり、彼等と議論するは何の事ぞ。一七 民中の一人答へて曰へり、師よ、我唾の鬼に憑られたる我が子を爾に攜へ來り。一八 鬼は何處に彼を執ふとも、投げ出し、彼沫を噴き、齒を切り、體枯る、我爾の門徒に之を逐ひ出ださんことを請ひたれども、彼等能はざりき。一九 イイスス彼に答へて曰く、噫信なき世や、我何時までか爾等と偕に在らん、何時までか爾等を忍ばん、彼を我が許に攜へ來れ。二〇 乃彼を攜へ來り、彼イイススを見れば、鬼忽彼を拘擥させ、彼地に仆れ輾びて沫を噴けり。二一 イイスス其父に問へり、彼に斯く爲りしは何の時よりか。曰へり、幼き時よりなり。二二 鬼は彼を滅さん爲に、

屢火に又水に投じたり。爾若し何かを能せば、我等を憫みて、我等を助けよ。二三 イイスス之に謂へり、爾若し幾何か信ずることを能せば、信ずる者には能せざることをなし。二四 童子の父直に涙を垂れて、呼びて曰へり、主よ、我信ず、我が不信を助けよ。二五 イイスス民の趨せ集るを見て、汚鬼を禁めて、之に謂へり、唾にして聾なる鬼よ、我爾に命ず、彼より出でて、再彼に入る勿れ。二六 鬼號びて、甚しく彼を拘擥させて出でたり、彼は死せし者の若くなりて、多くの者彼死せりと云ふに至れり。二七 イイスス其手を執りて、彼を起したれば、彼即立てり。二八 イイスス家に入りし時、其門徒私に彼に問へり、我等が之を逐ひ出だす能はざりしは何の故ぞ。二九 彼曰へり、祈禱と齋とに由らざれば、此の類は出づるを得ざるなり。三〇 彼等彼處を出でて、ガリレヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。三一 蓋其門徒に教へて、人の子には人人の手に付され、人人彼を殺し、殺されて後彼第三日に復活せんと曰へり。三二 唯彼等は此の言を曉らざりき、亦彼に問ふことを恐れたり。三三 彼カペルナウムに來りて家に在る時、彼等に問へり、爾等が途中相議せしは何の事ぞ。三四 彼等黙然たり、蓋途中孰か大なると相議したり。三五 彼坐して、十二徒を召して、之に謂ふ、先たらんと欲する者は、衆の後と爲り、衆の役者と爲るべし。三六 又幼兒を取りて、彼等の中に立て、且之を抱きて、彼等に謂へり。三七 我が名に因りて、是

くの如き幼児の一人を接けん者は、我を接くるなり、我を接けん者は、我を接くるに非ず、乃我を遣しし者を接くるなり。三八イオアン彼等に答へて曰へり、師よ、我等は爾の名を以て魔鬼を逐ひ出し、而して我等に従はざる人を見て、之に禁じたり、其我等に従はざる故なり。三五イイスス曰へり、之に禁ずる勿れ、蓋我が名を以て異能を行ひし者は、未だ幾ならずして我を誹る能はず。四〇蓋爾等に敵せざる者は爾等の與屬なり。四一爾等がハリストスに屬する故を以て、我が名に因りて、爾等に水一杯を飲ましめん者は、我誠に爾等に語り、其賞を失はざらん。四二然れども我を信ずる此の小子の一人を罪に誘はん者は、寧磨石を其頸に懸けられて、海に投ぜられん。四三若し爾の手爾を罪に誘はば、之を斷て、爾の爲には、殘缺にして生命に入るは、兩の手ありて地獄に滅えざる火に入るより勝れり、四四彼處には彼等の蟲死せず、火滅えず。四五若し爾の足爾を罪に誘はば、之を斷て、爾の爲には、跛にして生命に入るは、兩の足ありて地獄に滅えざる火に投ぜらるるより勝れり、四六彼處には彼等の蟲死せず、火滅えず。四七若し爾の目爾を罪に誘はば、之を抉れ、爾の爲には、一の目ありて神の國に入るは、兩の目ありて火の地獄に投ぜらるるより勝れり、四八彼處には彼等の蟲死せず、火滅えず。四九蓋凡の人は火を以て鹽せられん、又凡の祭物は鹽を以て鹽せられん。五〇鹽は善き物なり、然れども鹽若し其味を失

はば、何を以て之を鹹くせん。爾等の内に鹽を有ち、亦互の和平を有て。

第十章 イイスス起ちて彼處を去り、イオルダンの外よりイウデヤの境に來れり。民復彼に集れるに、彼は常の如く復之を教へたり。二フアリセイ等就きて、彼を試みて問へり、人其妻を出すは宜しきか。三彼答へて曰へり、モイセイは爾等に何を命ぜしか。四彼等曰へり、モイセイは離書を書きて、之を出すを許せり。五イイスス彼等に答へて曰へり、彼は爾等の殘忍なるに因りて、爾等の爲に此の誠を書せり。六然れども造成の始には、神之を男女に造れり。七是の故に人は其父母を離れ、八其妻に着きて、二の者一體と爲らん、然らば彼等は既に二人に非ず、乃一體なり。九故に神の耦せし者は、人之を分つ可からず。一〇家に在りて其門徒彼に復此の事を問へり。一一彼は之に謂ふ、其妻を出して他に娶る者は、妻に對して姦淫を行ふなり。一二妻も若し其夫を棄てて、他に適かば、姦淫を行ふなり。一三幼兒を彼に攜へ來れるあり、彼等に觸れん爲なり、門徒攜ふる物を戒めたり。一四然れどもイイスス之を見て、熨りて彼等に謂へり、幼兒の我に就くを容せ、之に禁ずる勿れ、蓋神の國は是くの如き者に屬す。一五我誠に爾等に語り、幼兒の如くに神の國を承けざる者は、之に入るを得ず。一六乃彼等を抱き、手を其上に按せて、

彼等を祝福せり。一七 彼が途に出づる時、或人趨り前みて、彼の前に跪きて問へり、善なる師よ、我永遠の生命を嗣がんに爲に、何を爲すべきか。一八 イイスス彼に謂へり、爾は何ぞ我を善と稱ふる、獨神より外に善なる者なし。一九 爾は誠を識れり、淫する母れ、殺す母れ、竊む母れ、妄證する母れ、欺き取る母れ、爾の父母を敬へ。

二〇 彼對へて曰へり、師よ、我幼より皆之を守れり。二一 イイスス彼に目を注ぎて、彼を愛し、而して彼に謂へり、爾に猶一の足らざる事あり、往きて爾の所有を售りて、貧者に施せ、然らば財を天に有たん、且來りて、十字架を負ひて我に従へ。二三 彼此の言に縁りて色沮み、憂ひて去れり、大なる資産を有てる故なり。二四 イイスス環視して、其門徒に謂ふ、富を有つ者の神の國に入るは難き哉。

二五 門徒其言に駭けり。イイスス復答へて彼等に謂ふ、小子よ、富を恃む者が神の國に入るは難き哉。二六 駱駝が針の孔を穿るは、富める者が神の國に入るより易し。二七 彼等甚驚きて互に言へり、然らば誰か能く救はれん。二八 イイスス彼等に目を注ぎて曰く、此れ人には能せざる所なれども、神には然らず、蓋神には能せざる所なし。二九 是に於てペトル彼に謂へり、視よ、我等一切を捨てて爾に従へり。三〇 イイスス答へて曰へり、我誠に爾等に語ぐ、我及び福音の爲に家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は子、或は田疇を捨て、三〇 而して今斯の時、窘逐の中に在りては、

家と、兄弟と、姉妹と、父と、母と、子と、田疇とを百倍多く受け、又未來の世に在りては、永遠の生命を受けざる者あらず。三一 唯多く先なる者は後になり、後なる者は先にならん。三二 イエルサリムに上る時、途中イイスス先だちて行き、彼等駭き且懼れて、之に従へり。彼復十二徒を召して、己に及ばんとする事を語つて三三 曰へり、視よ、我等イエルサリムに上る、人の子は司祭諸長及び學士等に付されん、彼等之を死に定め、之を異邦人に付し、三四 之を辱め、之を鞭ち、之を唾し、之を殺さん、而して彼第三日に復活せん。三五 時にゼウエデイの子イアコフ及びイオアン彼に就きて曰く、師よ、我等の求むる所、願はくは爾我等の爲に之を行へ。三六 彼は之に謂へり、我が爾等の爲に何を行はんことを欲するか。三七 彼曰へり、我等爾が光榮の中に於て、一人は爾の右に、一人は爾の左に坐せんことを賜へ。三八 イイスス彼等に謂へり、爾等の求むる所を知らず。爾等我が飲む爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くることを能するか。三九 彼等曰へり、能す。イイスス彼等に謂へり、爾等は我が飲む爵を飲み、我が受くる洗を受けん。四〇 然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與ふべきに非ず、乃備へられたる者に與へられん。四一 十門徒之を聞きて、イアコフ及びイオアンを燃れり。四二 イイスス彼等を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等其上に權を執るは、爾等の知る所な

り、四三唯爾等の中には斯くある可からず、乃爾等の中に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し、四四爾等の中に首たらんと欲する者は、衆人の僕と爲るべし。四五蓋人の子の來りしも、人を役はん爲に非ず、乃人に役はれ、且己の生命を與へて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。四六イエリホンに來る。彼が其門徒及び衆くの民と偕にイエリホンを出づる時、ティメイの子ワルティメイと云ふ瞽者道の旁に坐して乞へり。四七是れイエスナゾレイなりと聞きて、彼呼びて曰へり、ダワイドの子イエスよ、我を憐め。四八多くの者彼を禁めて黙さしむれども、彼愈大に呼べり、ダワイドの子よ、我を憐め。四九イエス止りて、彼を呼ばしめたれば人人瞽者と呼ばて、之に謂ふ、心を安んぜよ、起て、爾を呼ぶ。五〇彼上衣を棄てて、起ちてイエスに就けり。五一イエス答へて彼に謂ふ、我が爾に何を爲さんことを欲するか。瞽者曰く、夫子、我が見るを得んことを。五二イエス彼に謂へり、往け、爾の信は爾を救へり。彼直に見るを得て、イエスに路に從へり。

第十一章 イエルサリムに近づき、橄欖山に邇く、ワイファギヤ及びワイファニアに至らんとする時、イエス二人の門徒を遣して、二之に謂ふ、爾等の前なる村に往け、其内に入らば、直に繋ぎたる小驢、人の未だ乗らざりし者に遇はん、之を解きて、牽き來れ、

三若し爾等に何を爲すかと言ふ者あらば、主之を需むと言へ、然らば直に之を此に遣さん。四彼等往きて、岐路に門の外に繋ぎたる小驢に遇ひて、之を解けり。五彼處に立てる者の中、或人彼等に謂へり、小驢を解きて何をか爲す。六彼等イエスの命ぜし如く對へたれば、乃之を許せり。七己に小驢をイエスに牽き來りて、己の衣を其上に置き、イエス之に乗れり。八多くの者は己の衣を途に布き、他の者は樹の枝を伐りて途に布けり。九且前に行き後に從ふ人人呼びて曰へり、「オサンナ」、主の名に因りて來る者は祝福せらる、一〇我が父ダワイドの國、主の名に因りて來る者は、祝福せらる、至高きに「オサンナ」。一一イエス イエルサリムに至り、殿に入りて、徧く圓視し、時己に晩くなりしに因りて、十二徒と偕にワイファニアに出でたり。一二明日彼等がワイファニアを出でし時、彼飢ゑたり。一三遙に葉の有る無花果樹を見て、之に往けり、其上に得る所なきかと、既に來れば、葉の外に得る所なかりき、無花果の時未だ至らざればなり。一四イエス之に對ひて曰へり、今より後人永く爾の果を食ふ可からず。其門徒之を聞き。一五彼等復イエエルサリムに來れり。イエス殿に入りて、其中に貿易する者を逐ひ出だし、兌換する者の案と鴿を鬻ぐ者の椅とを倒し、一六且器を攜へて殿の中に過ぐるを許さざりき。一七又彼等に誨へて曰へり、我が家は萬民の爲に祈禱の家と稱へられんと録されたるに非ずや、然

るに爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。一八學士等及び司祭諸長は此を聞きて、如何にして彼を滅さんと謀れり、蓋彼を懼れたり、衆民其訓を奇とせしが故なり。一九時已に晩くなりて、彼城の外に出でたり。二〇翌朝過ぐる時、無花果樹の根より枯れたるを見たり。二一ペトル憶ひ起して、彼に謂ふ、夫子、觀よ、爾が詛ひし無花果樹は枯れたり。二三イイス答へて彼等に謂ふ、神を信ぜよ、二三蓋我誠に爾等に語ぐ、若し人此の山に移りて海に投ぜよと云ひ、而して其心に疑はずして、其言の如く成らんと信ぜば、何を言ふとも、彼に成らん。二四是の故に我爾等に語ぐ、凡そ祈禱の時に求むる所は、之を得んと信ぜよ、然らば爾等に成らん。二五又立ちて祈禱する時、若し人を憾むることあらば、之を免せ、天に在す爾等の父も爾等の過を免さん爲なり。二六若し人に免さば、天に在す爾等の父も爾等の過を免さざらん。二七復イエルサリムに來れり。彼が殿を歩める時、司祭諸長と學士等と長老等と彼に就きて二八曰く、爾何の權を以て是を行ふか、誰か爾に是を行ふ權を與へるたる。二九イイス答へて彼等に謂へり、我も亦一言爾等に問はん、我に答へよ、然らば我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げん。三〇イオアの洗禮は天よりせしか、抑人よりせしか、我に答へよ。三一彼等竊に議して曰へり、若し人よりと云はゞ、爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん、三二若し人よりと云はゞ、民を畏る、蓋皆イオアンを以

て實に預言者なりとせり。三三遂にイイスに答へて曰く、知らず。イイスも彼等に答へて曰く、我も何の權を以て、是を行ふを爾等に語げざらん。

第十二章 一遂に譬を以て彼等に語りて曰へり、或人葡萄園を樹ゑ、之に籬を環らし、酒榨を掘り、塔を建て、之を園丁に託して他方に往けり。二期に及びて、彼は園丁より葡萄の果を収めん爲に、其僕を園丁に遣せり。三彼等之を執へて打ち、空しく返らしめたり。四復他の僕を彼等に遣し、之をも石にて撃ち、其首に傷つけ、辱めて返らしめたり。五又復他の者を遣し、之を殺せり、其他の多くの者を或は打ち、或は殺せり。六猶其一の至愛の子あり、卒に是をも彼等に遣して曰へり、我が子に愧ぢんと。七然れども彼の園丁は相語りて曰へり、此れ嗣子なり、往きて彼を殺さん、然らば其嗣業は我等の有とならん。八乃之を執へて殺し、葡萄園の外に棄てたり。九然らば葡萄園の主は何を爲さんか、彼來りて園丁を滅し、葡萄園を他の者に託せん。一〇爾等聖書に、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり、一一此れ主の成す所にして、我等の目に奇異なりとすと、云ふを未だ讀まざりしか。一二彼等はイイスを執へんと謀りたれども、民を懼れたり、蓋其彼等を指して譬を言ひしを覺れり、乃彼を離れて去れり。一三又彼を其言に因りて害せん爲に、フアリセイ



等及びイロドの黨の數人を彼に遣せり。二四 此等の者來りて、彼に謂ふ、師よ、我等は爾が眞なる者にして、何人にも偏らざるを知る、蓋爾は貌を以て人を取らず、乃眞に神の道を教ふ、税をケサリに納むるは宜しや否や、一五 我等納めんか、納めざらんか。イイスス彼等の詐を知りて、之に謂へり、何ぞ我を試みる、銀一枚を攜へて我に視せ。一六 彼等攜へ來りしに、之に謂ふ、斯れ誰の像と號なるか。曰く、ケサリの。一七 イイスス彼等に答へて曰へり、ケサリの物をケサリに納め、神の物を神に納めよ。彼等之を奇と爲せり。一八 又サッドウケイ等、即復活なしと言ふ者彼に就きて問ひて曰く、一九 師よ、モイセイ我等の爲に書して云へり、若し人の兄弟死して、妻を遺し、子を遺さずば、其兄弟其妻を娶りて、兄弟の嗣を興すべしと。二〇 兄弟七人ありしが、第一の者妻を娶り、而して死して子を遺さざりき、二二 第二の者も之を娶りて死せり、亦子を遺さざりき、第三の者も亦然り、二三 七人之を娶りて子を遺さざりき、其後妻も亦死せり。二三 然らば復活には、彼等が復活せん時は、此の婦は其中誰の妻と爲らんか、蓋七人之を妻と爲せり。二四 イイスス彼等に答へて曰へり、爾等は聖書をも神の能をも知らずして、之が爲に迷ふか。二五 蓋死より復活せん時は、娶らず、嫁がず、乃天使等の如く天に在るなり。二六 死者の復活することに付きては、爾等モイセイの書に、棘の篇に於て、如何に神が彼に、我はアウラムの神、

イサアクの神、イアコフの神なりと、言ひしを未だ讀まざりしか、二七 神は死者の神に非ず、乃生者の神なり、故に爾等大に迷へり。二八 學士等の一人彼等の議論を聞き、イイススの善く對へしを見て、彼に就きて問へり、一切の誠の中何か第一たる。二九 イイスス之に答へて曰へり、一切の誠の中第一なる者は、云く、イズライリよ、聽け、主我等の神は一の主なり、三〇 又、爾心を盡し、靈を盡し、意を盡し、力を盡して、主爾の神を愛せよ、此れ第一の誠なり。三一 第二は是に同じき者、即爾の隣を愛すること己の如くせよ。斯の二の者より大なる誠は有らず。三二 學士彼に謂へり、善い哉師よ、爾が、神は一にして、其外に神なしと謂ひしは眞なり。三三 又、心を盡し、智を盡し、靈を盡し、力を盡して、彼を愛し、又己の如く隣を愛するは、悉くの全燔と祭祀とに愈れり。三四 イイスス其智を以て對へしを見て、之に謂へり、爾は神の國に遠からず。是より敢て復彼に問ふ者なかりき。三五 イイスス又殿に於て教を宣べて曰へり、學士等何ぞハリストスはダワイドの子なりと云ふ、三六 蓋ダワイド自ら聖神によりて言へり、主我が主に謂へり、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の竟と爲すに迄れと。三七 斯くダワイド自ら彼を主と稱ふ、如何ぞ彼は其子たる。衆くの民は樂みて彼に聞けり。三八 彼又其教の中に曰へり、謹みて學士等を防げ、彼等は長き衣にて遊ぶを好み、街衢には問安、三九 會堂には首

座、筵には上席を好む。四〇此等、癡の家を呑み、佯りて長き祈を爲す者は、尤重き定罪を受けん。四一 イイスス 獻賽函に對ひて坐し、民が金錢を獻賽函に投ずるを見たり。多くの富める者は、多く投じたり。四二 一人の貧しき癡來りて、二「レプタ」を投じたり、即五釐なり。四三 イイスス其門徒を召して、之に謂ふ、我誠に爾等に語ぐ、此の貧しき癡は凡そ獻賽函に投ずる者より多く投じたり。四四 蓋皆其羨餘より投じ、彼は其乏しき所より、凡の有てる者、即其生計を悉く投じたり。

第十三章 一 イイスス殿を出づる時、其門徒の一人彼に謂ふ、師よ、此の石の若何、此の造構の若何を觀よ。ニ イイスス彼に答へて曰へり、爾此等の大なる造構を見るか、此には一の石も石の上に遺らずして、皆圮されん。三 彼が橄欖山に殿に對ひて坐せる時、ペトル、イアコフ、イオアン、アンドレイ竊に彼に問へり、四 請ふ、我等に告げよ、何の時に此の事あらん、又此れ皆成らんとする時は、如何なる兆あるか。五 イイスス彼等に答へて曰へり、慎みて人に惑はざる、勿れ。六 蓋多くの者は我が名を冒して來り、是れ我なりと云ひて、多くの者を惑はさん。七 爾等戰と戰の風聲とを聞かん時、懼る、勿れ、蓋此れ有るべし、唯此れ尚末期には非ず。八 蓋民は民を攻め、國は國を攻めん、處處に地震あり、饑饉變亂あらん、此等は苦難の始

なり。九 爾等自ら慎め、蓋人人爾等を公會に解し、會堂に鞭たん、又爾等は我が爲の故に諸候諸王の前に立てられん、彼等に證を爲さん爲なり。一〇 福音は必先づ萬民に傳へらるべし。一一 爾等を曳きて解さん時、先づ何を言ふべきを慮る勿れ、又預め籌る勿れ、乃其時爾等に與へられん事を言へ、蓋爾等言はんとするに非ず、乃聖神なり。一二 兄弟は兄弟を父は子を死に付し、子は親を攻め、且之を殺さん。一三 爾等我が名の爲に衆人に憎まれん、唯終に至るまで忍ぶ者は救はれん。一四 爾等預言者ダニイルに因りて言はれたる荒廢の憎むべき物の立つ當からざる處に立つを見ば、(讀む者は悟るべし) 其時イウデアに在る者は山に遁るべし。一五 屋の上に在る者は家に下るべからず、其家より物を取らん爲に内に入るべからず。一六 田に在る者は其衣を取らん爲に歸るべからず。一七 當日には妊める者と乳を哺ます者とは禍なる哉。一八 爾等の遁ぐることの冬に在らざらん爲に祈れ。一九 蓋其日に有らんとする患難は、神が萬物を造りし始より今に至るまで、未だ此くの如きは有らざりき、後も亦有らざらん。二〇 若し主其日を減ぜざりしならば、凡の肉身は救はれざりしならん、然れども彼は其選びし所の選ばれたる者の爲に其日を減じたり。二二 其時若し人爾等に告げて、視よハリストス此にあり、或は視よ、彼に在りと云はば、信する勿れ。二三 蓋偽ハリスト及び偽預言者起りて、奇徴と奇蹟とを施し、若

し能すべくば、選ばれたる者をも惑はずに至らん。二三 爾等慎め、視よ我預め皆爾等に言へり。二四 其日、彼の患難の後、日は晦み、月は其光を施さず、二五 星は天より隕ち、天勢は震ひ動かん。二六 其時人の子が大なる權能と光榮とを以て雲に乗りて來るを見ん。二七 其時彼は其天使等を遣し、其選ばれたる者を四風より集めて、地の極より天の極に至らん。二八 無花果樹の譬を學べ、其枝已に柔にして、葉萌せば、爾等夏の近きを知る。二九 是くの如く爾等此等の事の成るを見ば、時の近くして、門に在るを知れ。三〇 我誠に爾等に語ぐ、此の代末だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三一 天地は廢せん、然れども我が言は廢せざらん。三二 其日其時は、之を知る者なし、天の使等も子も知らず、唯父のみ之を知る。三三 慎め、儆醒祈禱せよ、蓋爾等此の期の何の時に來るを知らず。三四 譬へば人他の地に往かんとして、其家を離るゝ時、其諸僕に權を與へ、各に爲すべきことを授け、闇者に儆醒せんことを命ぜしが如し。三五 故に儆醒せよ、蓋爾等は家主の何の時即暮に、或は夜半に、或は鷄鳴に、或は平旦に來るを知らず、三六 恐らくは、彼突に來りて、爾等の寢ぬるに遇はん。三七 我が爾等に儆醒せよと謂ふは、即衆人に謂ふなり。

#### 第十四章 一二日の後は逾越節及び除酵節なり。司祭諸長と學士等

とは如何に詭計を用ゐて、イイススを執へて、之を殺さんと謀れり、二 惟日へり、節期に於てすべからず恐らくは民の中に亂は起らん。三 彼がワイファニヤに於て癩者シモンの家に在りて席坐せる時、一の婦價貴き純良なる「ナルド」の香膏を盛れる玉の盒を攜へ來り、盒を破りて、彼の首に沃げり。四 或者愠りて、相語りて曰へり、此の香膏の藥費は何の爲ぞ、五 蓋此銀三百餘の價に賣りて、貧しき者に施すを得しならん。乃 婦を咎めたり。六 イイスス曰へり之を捨て。何ぞ之を擾す、彼は我が爲に善き功を爲せり、七 蓋貧しき者は常に爾等と偕にし、爾等欲する時之に善を行ふを得、我は常に爾等と偕にするにあらず。八 彼は能する所を行へり、即我が體に膏ぬりて、之を葬に備へたり。九 我誠に爾等に語ぐ、全世界の中、凡そ此の福音の傳へられん處には、此の婦の爲しゝ事も述べられて、其記念と爲らん。一〇 時に十二の一なるイウダ「イスカリオト」司祭諸長に往けり、イイススを之に賣らん爲なり。一一 彼等聞きて喜び、銀を彼に與へんことを約したれば、彼は如何にして好き機に於て之を付さんと謀れり。一二 除酵節の首の日、即逾越節の羔を宰る時、門徒イイススに謂ふ、我等が往きて、何處に爾の爲に逾越節の食を備へんことを欲するか。一三 彼二人の門徒を遣して、之に謂ふ、城に往け、水の盛れる瓶を攜ふる人爾等に遇はん、之に従ひて、一四 其入る所の家の主に語げよ、師言ふ、我

が門徒と偕に逾越節筵を食すべき室は何處に在るか。一五 彼爾等に敷き飾りて備へたる大なる樓を示さん、彼處に我等の爲に備へよ。一六 門徒出で、城に來りしに、其言ひし如き事に遇へり、乃 逾越節筵を備へたり。一七 暮に及びて、彼十二徒と偕に來る。一八 既に席坐して食する時、イイスス曰へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等の中の一人、我と共に食する者は、我を賣らん。一九 彼等憂ひて、一一 彼に謂へり、是れ我に非ずや、又他の者云ふ、是れ我に非ずや。二〇 答へて曰へり、十二の中の一、我と偕に盃に蘸す者はなり。二一人の子は逝く、之を指して録されしが如し、惟人の子を賣る者は禍なるかな、斯の人生れざりしならば、彼の爲に善かりしならん。二三 彼等が食する時、イイスス餅を取り祝福して之を撃き、彼等に與へて曰へり、取りて食へ、是れ我の體なり。二三 又爵を取り、感謝して彼等に與へしに、皆之を飲めり。二四 彼曰へり、是れ我の新約の血、衆くの人の爲に流さるゝ者なり。二五 我誠に爾等に語ぐ、我復葡萄の實より飲まずして、神の國に於て新しき者を呑む日に至らむ。二六 既に詠ひて、橄欖山に往けり。二七 イイスス彼等に謂ふ、爾等皆今夜我の爲に躓かん、蓋録せるあり、我牧者を撃たん、而して羊は散らんと。二八 我が復活の後、我爾等に先だちてガリレヤに往かん。二九 ペトル彼に謂へり、皆躓くとも、我は然らざらん。三〇 イイスス彼に謂ふ、我誠に爾に語ぐ、今日此の夜、鶏の再鳴

かざる先に、爾三次我を諱まん。三一 彼益力言して曰へり、我爾と偕に死すとも、爾を諱まざらん、皆亦是くの如く言へり。三二 ゲフシマニヤと名づくる處に來りて、イイスス其門徒に謂ふ、爾等此に坐して、我が往きて祈るを待て。三三 乃 ペトル、イアコフ、イオアンを攜へて己と偕にし、畏と哀とを催せり。三四 又彼等に謂ふ、我が靈憂ひて死に近づけり、爾等此に在りて儆醒せよ。三五 乃 少しく離れて、地に伏し、若し能すべくば、斯の時に彼を過ぎんことを祈りて三六 曰へり、「アウワ」父よ、爾には能くせざる所なし、此の爵をして我を過ぎしめよ、然れども我が欲する所成らずして、爾が欲する所成るべし。三七 遂に來りて、彼等の寝ぬるを見て、ペトルに謂ふ、シモンよ、爾寝ぬるか、一時も儆醒する能はざりしか、三八 爾等儆醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり、神は勇めども、肉體は弱し。三九 復往きて、同じき言を言ひて祈れり。四〇 返りて、彼等の復寝ぬるを見たり、其目倦みたればなり、彼等何を以て彼に對ふべきを知らざりき。四一 第三次來りて、彼等に謂ふ、爾等尚寝ねて休むか、己みぬ、時至れり、視よ、人の子は罪人の手に付さる。四二 起きよ、行かん、視よ、我を付す者は近づけり。四三 彼が尚言ふ時、忽 十二の一なるイウダは來り、劍と棒とを持てる多くの民、司祭諸長、學士等、及び長老等より遣されし者は、彼と偕にせり。四四 イイススを付す者彼等に號を與へて曰へり、我が接吻

せん者は、卽斯の人なり、彼を執へて、慎みて之を曳けと。四五來りて、直に彼に就きて曰く、夫子、夫子、乃彼に接吻せり。四六彼等其手をイイスに措きて、之を執へたり。四七此に立てる者の一人劍を抜きて、司祭長の僕を撃ちて、其耳を削げり。四八イイス彼等に謂へり、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて我を捕へん爲に出でたり。四九我日日爾等と偕に殿に在りて誨へしに、爾等我を執へざりき、然れども聖書は應ふべし。五〇其時皆彼を遺て、奔れり。五一一の少き者裸體に布を纏ひて、彼に従ひしに、兵卒之を執ふ、五二少き者布を棄て、裸體にして奔れり。五三イイスを曳きて、司祭長に至りしに、彼處には司祭諸長、長老等、學士等、咸く集れり。五四ペトル遠く彼に隨ひて、司祭長の中庭の内に入り、下吏等と偕に坐して、火に煖れり。五五司祭諸長及び全公會は、イイスを死に致さん爲に、彼に對する證を求めたれども、得ざりき。五六蓋多くの者彼に對して妄證したれども、其證は符はざりき。五七或者起ちて、彼に對して妄證して曰へり。五八我等其言ふを聞き、曰く、我手にて造られたる此の殿を毀ちて、三日の中に手にて造られざる他の者を建てんと。五九但し此の證も亦符はざりき。六〇是に於て司祭長中に立ちて、イイスに問ひて曰へり、爾答ふる所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。六一然れども彼默然として、一も答へざりき。司祭長復彼に問ひて曰へり、

爾は讚美せらるゝ者の子ハリストスなるか。六二イイス曰へり、我なり、且爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん。六三其時司祭長己の衣を裂きて曰く、我等何ぞ復證者を求めん、六四爾等其神を瀆すを聞き、爾等如何に意ふか。彼等皆之を死に當たる者と定めたり。六五是に於て或者は彼に唾し、亦其面を掩ひて、彼を撃ちて曰へり、預言せよ、下吏等も亦其頬を批てり。六六ペトル下に中庭に在る時、司祭長の婢の一人は來り、六七ペトルの煖まれるを見て、之に目を注ぎて曰く、爾もナザレトのイイスと偕に在りき。六八然れども彼諱みて曰へり、我爾が言ふ所を知らず、亦覺らず。乃外に前庭に出でたれば、鶏鳴けり。六九婢又彼を見て、旁に立てる者に謂へり、此の人も其黨の一人なり。七〇彼復諱みたり。少頃ありて彼處に立てる者、復ペトルに謂へり、誠に爾等も其黨の一人なり、蓋爾はガリレヤ人にして、爾の言語は似たり。七一彼は詛ひ且誓へり、我爾等が言ふ所の人を識らずと。七二斯の時鶏再鳴けり。ペトルはイイスの彼に、鶏の二次鳴かざる先に爾三次我を諱まんと、云ひし言を憶ひ起して哭けり。

**第十五章** 一平旦に及びて、直に司祭諸長は長老等學士等及び全公會と共に集議し、イイスを縛りて、曳きてピラトに解せり。二ピラト彼に問へり、爾はイウデヤ人の王なるか。彼答へて曰へり、

爾言ふ。三 司祭諸長は多くの事を以て彼を訴へたり。四 ピラト復彼に問ひて曰へり、爾答ふる所なきか、觀よ、爾に對して證するこ  
と幾何ぞ。五 イイスス仍一言も答へざりき、ピラト奇むに至れり。  
六 節期には、彼一人の囚を、民の求むる所に任せて釋すことあり  
き。七 時にワラウワと名づくる者、其共謀者と偕に繋がれ居たり、  
即騷亂の時に殺人を爲し、輩なり。八 民は聲を揚げて、常に彼等  
の爲に行ひし如く爲さんことを求めたれば、九 ピラト答へて曰へり、  
我が爾等にイウデヤ人の王を釋さんことを欲するか。一〇 蓋司祭  
諸長が媚嫉に因りて彼を解ししを知れり。一一 然るに司祭諸長に民  
を唆めて、寧ワラウワを釋さんことを乞はしめたり。一二 ピラト答  
へて復彼等に謂へり、然らば爾等がイウデヤ人の王と名づくる者に  
は、我が何を爲さんことを欲するか。一三 彼等復號びて曰へり、彼を  
十字架に釘せよ。一四 ピラト彼等に謂へり、彼は何の惡を行ひしか。  
然れども彼等愈號べり、彼を十字架に釘せよ。一五 其時ピラト民の  
望に適はしめんと欲して、ワラウワを彼等に釋し、イイススを鞭ち  
て、十字架に釘せん爲に付せり。一六 兵卒彼を曳きて、中庭の内、  
即公廨に至り、全營を集め、一七 彼に紫袍を衣せ、棘の冕  
を編みて冠らせ、一八 其安を問ひて曰へり、イウデヤ人の王、慶べ  
よ。一九 又葦を以て其首を撃ち、彼に唾し、跪きて彼を拜せり。  
二〇 既に戯れ畢りて、其紫袍を褫ぎ、彼の衣を衣せ、十字架に釘

せん爲に彼を曳き往けり。二一 或キリネヤの人シモン、即アレキサ  
ンドル及びブルフの父が、田より來り過ぐるを強ひて、其十字架を負は  
しめたり。二二 ゴルゴファの處、譯すれば、髑髏の處に曳き至り  
て、二三 没藥を和へたる酒を彼に飲ませしに、彼受けざりき。二四 彼  
を十字架に釘せし者は其衣を分ち、孰か何を得んと圖を取れり。二五  
第三時に在りて、彼を十字架に釘せり。二六 其罪に標に書して曰へ  
り、イウデヤ人の王と。二七 彼と偕に二人の盜賊を十字架に釘せり、  
一人は其右、一人は其左なり。二八 是に於て聖書の言應へり、曰く、  
罪犯者と偕に算へられたりと。二九 過ぐる者彼を誚り、首を揺かし  
て曰へり、噫殿を毀ちて三日に之を建つる者よ、三〇 己を救ひて十  
字架より下れ。三一 同じく司祭諸長も學士等と偕に嘲りて、相語り  
て曰へり、他人を救ひて、己を救ふ能はず。三二 ハリストス、イズ  
ライリの王、今十字架より下るべし、我等が見て彼を信ぜん爲なり。彼  
と偕に十字架に釘せられし者も彼を訴れり。三三 第六時に及び、晦冥  
は全地を蔽ひて、第九時に至れり。三四 第九時にイイスス大聲に呼  
びて曰へり、「エロイ、エロイ、ラマ、サワファニ」譯すれば、我が神  
よ我が神よ、何ぞ我を遺てたる。三五 旁に立てる者の中、或人之を聞  
きて曰へり、視よ、イリヤを呼ぶ。三六 一人趨り往きて、海絨に醋  
を盈たし、葦に束ねて、彼に飲ましめて曰へり、姑く舍け、イリヤ來  
りて、彼を下すや否やを觀ん。三七 イイスス大聲を發して、氣絶えた

り。三八時に殿の幔は、上より下に至るまで裂けて、二となれり。三九彼に對ひて立ちたる百夫長は、其斯く呼びて氣絶えしを見て、曰へり、斯の人は誠に神の子なり。四〇彼處に亦遙に望める婦等あり、其中にマリヤ「マグダリナ」、小なるイアコフとイオシヤとの母マリヤ、及びサロミヤ、四一 卽彼がガリレヤに在りし時にも彼に従ひて事へし者、及び其他彼と偕イエルサリムに上りし多くの婦ありき。四二 日已に暮れしに、(是の日に備節日にして安息日の前日なりし故)、四三 アリマフェヤの人イオシフ、貴き議士、自らも神の國を俟てる者は來り、毅然としてピラトの許に入りて、イイススの屍を求めたり。四四 ピラト其已に死せしを奇み、百夫長を召して、彼死して久しきかと問ひ、四五 百夫長より之を知りて、屍をイオシフに與へたり。四六 彼は布を買ひ、之を下して布に裏み、之を磐に鑿ちたる墓に置き、石を墓の門に轉せり。四七 マリヤ「マグダリナ」及びイオシヤの母マリヤは彼を置きたる處を見たり。

第十六章 一 安息日過ぎて、マリヤ「マグダリナ」イアコフの母マリヤ、及びサロミヤ、香料を買ひたり、往きてイイススに齎らん爲なり。二 七日の首の日甚早く、墓に來る、日の出づる頃なり。三 相語りて曰へり、誰か我等の爲に石を墓の門より移さん。四 目を擧げて、石の已に移されたるを見る、蓋其石は甚大なり。五 彼等墓に入りて、

白衣を衣たる少者が右の方に坐せるを見て駭けり。六 彼は之に謂ふ、駭く勿れ、爾等は十字架に釘せられしナザレトのイイススを尋ぬ、彼は復活して、此に在らず、觀よ、此は彼を置きし處なり。七 往きて、其門徒及びペトルに語つて言へ、彼は爾等に先だちてガリレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見ん、其爾等言ひしが如しと。八 婦急ぎ出で、墓より奔り、戦き且つ驚きて、一言も人に語げざりき、懼れしが故なり。九 七日の首の日朝早く、イイスス復活して、先づマリヤ「マグダリナ」、卽其曾て七の魔鬼を逐ひ出し、所の者に現れたり。一〇 婦往きて、先に彼と偕に在りし哀み哭ける者に告げたれども、一一 彼等其生きて、之に見られたりと聞き、信ぜざりき。一二 其後彼等の中に二人が村に往く時、イイスス變りたる容を以て之に途に現れたり。一三 二人返りて、餘の者に告げしに、彼等をも信ぜざりき。一四 卒に十二門徒に其席座の間に現れて、其信なきと心の頑なるとを責めたり、彼の復活したるを見し者を信ぜざりし故なり。一五 又彼等に謂へり、全世界に往きて、福音を悉くの受造物に傳へよ、一六 信じて洗を受くる者は救はれ、信ぜざる者は罪に定められん。一七 信する者には斯の休徴は從はん、我が名に因りて、魔鬼を逐ひ出し、新なる方言を言ひ、一八 蛇を繰り、毒を飲むとも、彼等を害せざらん、手を病者に按せば、愈ゆるを得ん。一九 主は彼等に語りし後天に升り、神の右に坐せり。二〇 彼等は出で、四方に教を傳

へ、主は彼等を相け、之に從ふ休徴を以て其言を固めたり、「アミン」。